



毎日の家族のごはん どんなメニューでもこのお盆は欠かせない

お盆は山本英明さん作。最初は夫婦用に2枚そろえ、子どもが生まれてから、もう1枚買い足した。お客さま用になってしまいがちな漆も、日常的に使う。

ひかれるのは「使い込むうちに味わいが出る」もの
高価な器もアートも、日常のなかで使ってこそ

松原幸子さん（東京都）

バルコニーには、環境デザインチーム「5X緑」のミニ生け垣「里山ユニット」などを置いて。



WA
Interior

1 好きなものに囲まれて心豊かに暮らす家

庭に生えるグリーンもテーブルに取り入れて



1 漆のお盆に、庭で摘んだ葉ランを敷いてちらし寿司を盛ること
も。2 手前は佐渡のおじいさまの家で捨てられそうになっていた
のを救い出した、古い染付け。奥の小鉢は骨董市で購入。

東京・阿佐谷で、器と料理を提供するカフェ「ひねもすのたり」を経営する松原さん。好きな器やアートを見る目を養ったのは、ギャラリーのある和食店で働いていたときでした。2年を経ることに味が出てくるもの、「どどんと使い込んでいけるもの」のよさを、実践で学んだといいます。

まだお金に余裕のなかった二十数年前に月賦で買った漆のお盆は、もちろん今も現役。つやが出て、いい表情になってきました。また、器は大切に扱っていても長く使っていれば割れることもあります。それを恐れてしまい込むより、「壊れたら直せばいいじゃない」と、自ら金継ぎの技術を習得したのだそう。

子どもが生まれて家族が増えたときは、テーブルを作った作家さんに頼んで、板を接ぎ大きくすることを選択。新しいものを購入するのと同じくらいの金額がかかりましたが、それでも今まで大切に使用してきた思い出や愛着には替えられません。

新しいものをそろえるより、好きなものをとことん使い込み、自分で育てていくことこそ、大人の物とのつき合い方。松原さんの暮らしは、そんなことを教えてくれました。



夫婦で晩酌を楽しむときは、床に座って、この小家具をテーブル代わりに。酒器は森岡成好さんの鳩徳利。

1 和室のちゃぶ台は、脚がはずせるので大きなお盆としても使える。2 ご主人がよく昼寝をする、通称「惰眠部屋」。畳とひのきの香りがリラックス効果抜群。



1
2
なにもしない空間があると心がやすらぐ



1 板を左右に接いで大きくしたテーブルは、いずれ息子さんに譲るつもり。2 ハンス・J・ウェグナーのYチェアには、15年前から少しずつ作品を買いつけているウスタニミホさんの座布団を。



おもてなしにはトレイが必須

1 お手製のすいかゼリーを、ガラスの器に盛って涼しげに。口当たりがやさしい漆のスプーンを添えて。2 骨董や和食器に、洋食器をひとつ合わせると軽い印象になる。3 作家ものの器はシンプルに使うことで、モダンな食卓に。